

早稲田大学博士論文(概要)		
2011	学位記	文科省報告
	5770	甲 3446

論文概要書

自由と承認 ——シモーヌ・ド・ボーヴォワールの倫理思想——

杉藤雅子

ボーヴォワール研究は、現在、第三の視点からなされている。第一の視点は、言うまでもなく、実存主義である。第二の視点はフェミニズムである。1960年代末に欧米で女性解放運動が起こり、ボーヴォワールの『第二の性』(1949)はフェミニズムの理論書として読まれた。そして、現在、ボーヴォワール研究は第三の視点からなされている。それは、第一の視点と第二の視点において見落とされていたボーヴォワールの哲学を、彼女自身のテクストに即して研究するというものである。それは、運動としての実存主義やフェミニズムそのものではなく、それらを支えている哲学に迫ることである。本論文も、第三の視点からなされた研究に基づいている。

ボーヴォワール(1908-1986)は、プチ・ラルースの1974年版には女性文学者、サルトルの弟子と、1987年版にはサルトルの弟子、伴侶、熱心なフェミニストと記されている。また、ハーバート・スピーゲルバーグ¹やアルノ・ミュンスター²におけるように、哲学者と見なされている場合でも、ジャン＝ポール・サルトル(1905-1980)の追従者(followings)の一人として位置づけられている。本論文の目的は、これらの見解を検証すると共に、ボーヴォワールの哲学を、彼女自身のテクストに基づいて明らかにすることである。

私は、ボーヴォワールの「自伝」、「日記」、「手紙」などを参考にしながら、『ピュロスとシネアス』(1944)、『両義性のモラル』(1947)、『第二の性』を中心に、実存思想、現象学、倫理思想に焦点を当てて研究をしてきた。その研究の結論として言えることは、以下の三点である。その一つは、哲学において、ボーヴォワールはサルトルの単なる追従者ではなく、1940年代の自由と承認をめぐる倫理思想においては、ボーヴォワールがサルトルをリードしていたということ。二つ目は、ボーヴォワールの承認論は、ヘーゲルの相互承認論とフッサールの間主観性論を融合したものであるということ。そして、三つ目は、これらが『ピュロスとシネアス』の研究から導きだされることから、ボーヴォワールの哲学の主著は『ピュロスとシネアス』であるということである。

では、これらの結論を論証していくことにする。サルトルの『存在と無』(1943)においては、自己と他者との間に積極的な承認が成り立つ余地はない。また、承認に言及している箇所でも、「他者を承認することは他有化を体験することであり、私の対他存在を引き受けることである」と言われている³。さらに、「われわれは平等の次元、すなわち、他者の自由を承認すれば、われわれの自由が他者によって承認されるようになるというような次

¹ Herbert Spiegelberg, *The Phenomenological Movement: A Historical Introduction*, Den Haag: Martinus Nijhoff Publishers, 1982, pp. 530-531 (『現象学運動』立松弘孝監訳、世界書院、2000年、下巻 175-177頁)。

² Arno Münster, *Sartre et la morale*, Paris: L'Harmattan, 2007, p.17.

³ Jean-Paul Sartre, *L'être et le néant*, Paris: Gallimard, 1943, pp. 609-610/tel571 (『存在と無Ⅲ』松浪信三郎訳、人文書院、1960年、213-214頁)。

元に身を置くことはできない」とも言われている⁴。

ところが、『実存主義はヒューマニズムである』(1946)では、一転して、「われわれは自由を欲することによって、われわれの自由は他人の自由の依拠していること、他人の自由はわれわれの自由の依拠していることを発見する」と述べられている⁵。

それに対して、ボーヴォワールの『ピュロスとシネアス』には、すでに、二つの承認論が提示されている。一方はフッサールに由来する、同時になされる自由な主体どうしの、自由な主体としての承認であり、ボーヴォワールはこれを『第二の性』においても堅持している。他方はヘーゲルに由来する、「わたしが作り出すもの」を媒介とする、価値評価的承認であるが、ヘーゲルの主と奴の間の価値評価的承認が不平等な二者の間でなされるのに対して、ボーヴォワールの価値評価的承認はともに自由な人々の間でなされる。価値評価的承認は、たとえば読者が作家を承認する場合のように、同時に、相互になされるものではないが、ボーヴォワールは、作家も読者もともに自由でなければならないと考えている⁶。

ボーヴォワールが1940年にヘーゲルの『精神現象学』を読んだことは、自伝『女ざかり』(1960)にも記され、周知の事実であったが、どのような形の『精神現象学』を読んだのかということは長いこと分からなかった⁷。彼女の死から4年後の1990年に『戦中日記』と『サルトルへの手紙』が出版されると、当時の諸状況がより詳細に分かるようになった。1940年7月14日付のサルトルへの手紙から、ボーヴォワールが読んだのはアンリ・ルフェーブルとノルベルト・グーターマンが編纂した *g.w.f.hegel morceaux choisis 1 et 2* という本であることが分かった⁸。

ボーヴォワールは、『戦中日記』において、ヘーゲルの相互承認論を解釈して、「意識相互による承認の要求——これは愛、芸術的表現、行動等における承認が有効かつ自由であるための、各々の意識の自由の要求でもある」と述べている⁹。そこから、自由な主体どうしの、自由な主体としての承認が要請されるが、それは『ピュロスとシネアス』では次のように表現されている。

明らかにされ、同意された承認(*reconnaissance éclairée, consentie*)において、相いれないように見えるこれら二つの自由、すなわち他者の自由とわたしの自由を向かい合ったままにしておくことができない。わたしは同時に対象としてまた自

⁴ *Ibid.*, p. 479/449 (『存在と無Ⅱ』松浪信三郎訳、人文書院、1956年、414頁)。

⁵ J.-P. Sartre, *L'existentialisme est un humanisme*, Paris : Nagel, 1946, p. 83 (「実存主義はヒューマニズムである」伊吹武彦訳、『実存主義とは何か』、人文書院、1955/1996年、75頁)。

⁶ S. de Beauvoir, *Pyrrhus et Cinéas*, Gallimard, 1944/folio2003, p.96/289.

⁷ S. de Beauvoir, *La force de l'âge*, Gallimard, 1960/folio2002, pp.523-538 (『女ざかり下』朝吹登水子・二宮フサ訳、紀伊國屋書店、1963年、86-100頁)。

⁸ Henri Lefebvre et Norbert Guterman, *g.w.f.hegel morceaux choisis 1 et 2, idées, nrf*, Gallimard, 1939.

⁹ S. de Beauvoir, *Journal de guerre*, Gallimard, 1990. p.361 (『ボーヴォワール戦中日記』西陽子訳、人文書院、1993年、332頁) *Ibid.*, p. 365 (同書、335-336頁)にも次のように記されている。「他人の意識の別の面。ある意味で、それは敵であるが、それによらなければ、何も価値を持たない(ヘーゲル)。

……意識相互の承認についてのヘーゲルの深い考え」。

由として自己を把握しなければならないし、状況を越えて自分の存在を肯定しながらも、わたしの状況を、他者によって設定されたものとして認めなければならない¹⁰。

『両義性のモラル』の「第Ⅰ部」では、サルトルの存在欲求の存在論を弁護する過程で、存在開示の現象学的存在論が提示されている。人間は、世界を開示すると同時に自己の存在を開示し、世界に新たな意味を付与する存在であるが、そのような存在は自由でなければならない。そこでは、次のように言われている。

世界の開示を望むことと、自分が自由であることを望むことは、まったく同一の運動である。自由はすべての意味とすべての価値が出現する源泉である。自由は実存のあらゆる理由づけの根源的条件である。自分の生を理由づけしようとする人は、何よりもまず、そして絶対的に、自由そのものを望まなければならない¹¹。

また、ボーヴォワールは、『両義性のモラル』の「第Ⅱ部」で、人間のさまざまな態度における自由のあり方について論じているが、そこでは、自分の自由のみならず、他の人々の自由を尊重し、彼らが自由になるよう手助けをする人が本来的に自由な人とされている。さらに、そこでは、「他者の自由の承認はわたしの自由を限界づけるというのは、真ではない。……自由としての他人の実存は、わたしの状況を限定するが、それはわたしの自由の条件ですらある」と述べられている¹²。

ボーヴォワールは、承認論をヘーゲル研究から得たが、『両義性のモラル』では、個別性が否定されているという理由で、ヘーゲルの承認論を批判している¹³。

『第二の性』を書くにあたって、ボーヴォワールが採用しているのは、実存主義のモラルの観点であり、それは個人の自由の実現を目指すというものである。そして、『第二の性』は相互承認への呼びかけをもって終わっている。

女を解放することは、女が男とともに支えている関係のなかに女を閉じ込めることを拒むことであって、その関係を否定することではない。女が自分は自分のために存在していると言おうとも、やはり男のためにも存在し続けるだろう。相互に主体として承認し合いながらも、各々は他方にとっては他者のままだろう。男女の関係の相互性は、人間が二つの切り離されたカテゴリーに分けられていることから生まれる、欲望、所有、愛、夢といった奇跡を消し去りはしないだろうし、わたしたちを感動させる、与える、征服する、結ばれるといった言葉は、その意味を保つだろう。人類の「分割」がその本当の意味を明かし、人間のカップルがその真の形を見出すのは、逆に、人類の半分の隷属状態と、隷属状態がもたらす偽善のすべてがなくなるときである¹⁴。

¹⁰ S. de Beauvoir, *Pyrrhus et Cinéas*, pp. 83-84/277.

¹¹ S. de Beauvoir, *Pour une morale de l'ambiguïté*, Gallimard, 1947/folio2003, pp. 34-35/31-32.

¹² *Ibid.*, p. 127/113.

¹³ *Ibid.*, p. 146/130. *Ibid.*, p. 151/134.

¹⁴ S. de Beauvoir, *Le deuxième sexe II*, Gallimard, 1949(1987)/folio1986(2002), p. 576/662.

ボーヴォワールは、『第二の性』、「I 事実と神話」の「第三部神話」においても「承認」に言及している。

こうした〔他人の自由とわたしの自由の衝突という〕悲劇は、それぞれが自己と他者を、一回の相互運動において、同時に客体とした主体としながら、他において、各個人を自由に承認することによって克服することができる。しかし、こうした自由の承認を実際に実現する友情、寛大さは容易な徳ではない。それらは確かに人間の最高の成就であり、それによって、人間はその真理のうちにあるが、この真理は絶えず生じ、絶えず消える闘争の真理であり、それは人間が刻一刻と自己を克服することを要求する¹⁵。

この発言に先立って、ボーヴォワールは他者について次のように述べている。

他者が、それ自身、自己に現前しているのでなければ、他者の現前はない。すなわち、真の他者性とは、わたしの意識から切り離されているが、わたしの意識と同一である一つの意識の他者性なのだ¹⁶。

この部分について、サラ・ヘイネマーは、ボーヴォワールはフッサールの以下のような考えを繰り返していると述べている。

フッサールは『デカルト的省察』で、他の意識的存在、他の人間を見ることは、あなたを見ることのできる誰か、彼/彼女を見ているあなたと類似している誰かを見ることであると指摘している。このように、相互性は、フッサールによれば、他者と関わるための必要条件である。すなわち、他者を見ることは、あなたが、彼/彼女を見ているものとして見るということを必要とする¹⁷。

「第三部神話」におけるボーヴォワールの相互承認論において、互いを見ている二人の人は同一の意識を持っており、共に、見ている主体（自由）であると同時に見られている客体（対象）である。ヘイネマーは、ボーヴォワールの、自由な主体どうしの、自由な主体としての承認論の相互性と同時性はフッサールに由来すると考えているのだ。

また、上に引用した「第三部神話」における相互承認論は、『ピュロスとシネアス』の pp. 83-84/277 で提示されている相互承認論と、自己と他者が同時に自由な主体として承認し

¹⁵ S. de Beauvoir, *Le deuxième sexe I*, Gallimard, 1949(1986)/folio1986(2005), p. 232/240.

¹⁶ *Ibid.*, p. 231/239.

¹⁷ Sara Heinämaa, *Toward a phenomenology of sexual difference : Husserl, Merleau-Ponty, Beauvoir*, Lanham, Md.: Rowman & Littlefield Publishers, Inc. 2003, p. 89. Beauvoir's Phenomenology of Sexual Difference, *The Philosophy of Simone de Beauvoir, Critical Essays*, edited by Margaret A. Simons, Indiana University Press, 2006, p. 33. ヘイネマーは論拠として *Cartesianische Meditationen und pariser Vorträge, Husserliana, Band I*, S. 122 (『デカルト的省察』浜渦辰二訳、岩波書店、2001年、164-167頁)を挙げている。

合うという点で、また、視点を変えれば、両者ともが同時に客体であるという点で、同じ構造を持っている。したがって、ヘイネマーの主張が正しいのなら、ボーヴォワールは 1944 年以前にフッサールの間主観性論を知っていたことになる。ウエンディ・オブライエンも、ボーヴォワールは 1931 年に出版された『デカルト的省察』の仏訳を読んだはずだと述べている¹⁸。

私も、ボーヴォワールは 1944 年以前にフッサールの『デカルト的省察』を読んでいたと考えている。というのも、『ピュロスとシネアス』には、フッサールに由来する、同時になされる自由な主体どうしの、自由な主体としての承認への言及と並んで、他人と、人間によって規定された個別的な神と人類とが閉じたものであると同時に開いたものであるという二つの相のもとに現れるという記述があるからだ¹⁹。これらは、フッサールの『デカルト的省察』において、「モナド」および「モナドの共同体」と呼ばれているものと同じ構造を持っている²⁰。こうしたことを考慮すると、ボーヴォワールの人間観は、フッサールのモナドロギーに依拠していると言える。

しかし、フッサールが問題にしているのは、他者経験の構造を明らかにすることであって、自己と他者の間に承認の関係を構築することではない。それに対して、ボーヴォワールは、『ピュロスとシネアス』において、切り離され、対立している自己と他者はどのような関係を築くことができるのだろうかと問い、いくつかの形態のもとでの自己と他者の関係を考察している。

「献身」の章で、前述の相互承認論が提示されているが、ボーヴォワールは、献身においては、ともに自由なわたしと他者の間の承認はないと考えている。ボーヴォワールによれば、ひとが献身をするのは、それによって危険や不安から解放されたいと思っているからだ。つまり、献身をする人は、その存在が正当化されていると思える人に献身することで、自己の存在が正当化されると思っているのである²¹。それにもかかわらず、献身をする人は、恩知らずにしか出会わないとしばしば嘆く。それは献身の見返りを求めるからである。また、献身はその対象となる人をいらだたせさえる。献身をする人は対象となる人の意思に反して献身することもあるからだ²²。

ボーヴォワールは、献身にジェネロジテを対置し、「わたしたちの行為は曇りのないジェネロジテ（寛大さ）によって導かれなければならない」と述べている²³。ボーヴォワールのジェネロジテとは、自分の自由に基づいて行動し、他人からの見返りを求めないことで

¹⁸ Wendy O'Brien, Introduction, *The Existential Phenomenology of Simone de Beauvoir*, Kluwer Academic Publishers, 2001, p. 3. Edmund Husserl, *Méditations Cartésiennes, Introduction à la phénoménologie*, Traduit par Gabrielle Peiffer et Emmanuel Lévinas, A. Colin, 1931; Paris : J. Vrin, 1947.

¹⁹ 「他人」については *Pyrrhus et Cinéas*, p. 68/262 を、「人間によって規定された個別的な神」については *Ibid.*, p. 40/233 を、「人類」については *Ibid.*, p. 45/238 を参照。

²⁰ 「モナド」はライプニッツのモナドロギーに由来するが、ライプニッツのモナドが「窓」を持たないのに対して、フッサールのモナドは「窓」を持っている。フッサールのモナドは「実質的」にも「実在的」にも「窓」を持たず、分離されているが、「志向的」には「窓」を持っている（『デカルト的省察』浜渦辰二訳、332-333 頁、注 52）。

²¹ S. de Beauvoir, *Pyrrhus et Cinéas*, p. 70/264.

²² *Ibid.*, p. 71/265.

²³ *Ibid.*, p. 84/278.

あるが、それは他人の自由を認めることでもある。寛大な人(homme généreux)は、自分の行動が他人の外にしか届かないことを知っている。寛大な人が望むことができるのは、自分の自由な行動が、自由なものとして認められることだけである²⁴。

「交流」の章では、「わたしが作り出すもの」を媒介とする、ともに自由なわたしと他者の交流と承認が描かれている。この「もの」には作品だけでなく、行為や人生も含まれる。そして、「行動」の章では、わたしの作品や行為の価値を決めるのは他者であり、他者とのこうした関係を築くためには、まず、わたしが他者に呼びかけなければならないと言われている。

そして「結論」では、わたしと同等の人々の間の承認が次のように表現されている。

他の人々によって承認されるためには、まず、わたしが他の人々を承認しなければならない。わたしたちの自由は、支柱が支えなくても、一つのアーチを形作る複数の石のように、互いに支え合っているのだ²⁵。

サルトルも『倫理学ノート(1983)』において、自己と他者の関係を考察している。『倫理学ノート』は、1947-1949年に書かれたが、生前に発表されることはなかった。それは600ページに及ぶ大著であり、その多くは疎外論や暴力論に費やされている。そうしたなかで、水野浩二氏、澤田直氏、アラン・ルノーが、期せずして注目しているのが、以下の箇所である。

(8) 他人への呼びかけ(appel)。他人をどのように考えるか……

他人との直接的関係をもつことを諦めること。

決して直接的ではない他人との真の関係。すなわち、作品を媒介とした関係。

私の自由は相互承認を含んでいる。

しかし、ひとは自分を与えることによって自分を失う。ジェネロジテ。愛。

私の対自と私の対他との新たな関係、すなわち、作品による関係。私は、他人に自己を、私が作る対象として与えることによって、自己を規定するが、その結果、他人は私にこの対象性を送り返す²⁶。

ここに見られる「呼びかけ」、「作品を媒介とした他人との関係」、「相互承認」、「ジェネロジテ」は『ピュロスとシネアス』においてすでに論じられている。しかも、サルトルが『倫理学ノート』を書いていたときには、『ピュロスとシネアス』はすでに刊行されていた。また、水野氏がサルトルの相互承認論の出発点に置く『実存主義はヒューマニズムである』は、『ピュロスとシネアス』の刊行の翌年に行われた講演を基にして書かれている。

サルトルが『倫理学ノート』を生前には発表せずに、放棄してしまった理由に関する水野氏、澤田氏、ルノーの見解は異なっている²⁷。だが、いずれにしても、1940年代の倫理

²⁴ *Ibid.*, p. 83/277.

²⁵ *Ibid.*, p. 120/313.

²⁶ J.-P. Sartre, *Cahiers pour une morale*, Gallimard, 1983, p. 485.

²⁷ 水野氏と澤田氏の見解については、本論文、「第八章『ピュロスとシネアス』と『倫理学ノート』」の

思想においては、ボーヴォワールがサルトルをリードしていたと考えるのが妥当であろう。

スピーゲルバーグは、『現象学運動』において、「ボーヴォワールは、特に倫理学の分野で、サルトルの基本的な考えをもっとも直載にかつ変更を加えずに表現した人と言えるだろう。しかし、フランス現象学の歴史のなかでもサルトルのそれに対する彼女のかけがえのない貢献を別とすれば、彼女の著作における現象学的な要素は比較的わずかであり、ほとんど表立っていない」と述べている²⁸。だが、スピーゲルバーグのこの主張は、本論文において、完全に覆された。

『ピュロスとシネアス』の第一部では、フッサールのモノドロギーに依拠するボーヴォワールの人間観が、第二部では、ヘーゲルの相互承認論とフッサールの間主観性論を融合させたボーヴォワールの承認論が提示されている。また、『ピュロスとシネアス』には、サルトルの『実存主義はヒューマニズムである』を先取りしている部分があり、その現象学的存在論には、メルロ＝ポンティの後期の現象学的存在論を先取りしている可能性がある。こうしたことから、私は、ボーヴォワールの哲学の主著は『ピュロスとシネアス』であると考えている。

研究を進めるうちに、新たな疑問が生じてきた。その最大のものは、ボーヴォワールは、いつ、どのようにして、フッサールのモノドロギーや間主観性論を受容したのかということである。ボーヴォワールがソルボンヌ大学で哲学の卒業論文を仕上げようとしていた1928年から1929年の日記には、のちに『デカルト的省察』として刊行された、フッサールの1929年2月のソルボンヌ講義への言及はない²⁹。

マーガレット・A・シモンズによれば、ボーヴォワールの1927年の日記には、現象学、志向性の概念、フッサールへの言及はないが、ボーヴォワールは1927年にはすでに「受肉」や「生きられる身体」の概念を獲得していた³⁰。それでは、ボーヴォワールはこれらの概念をどのようにして獲得したのだろうか。

したがって、これらの疑問を解くことが今後の研究課題となるだろう。ボーヴォワールの承認論がフッサールの間主観性論に依拠していることに加えて、『ピュロスとシネアス』、『両義性のモラル』、『第二の性』には現象学的存在論が、『ピュロスとシネアス』には時間への現象学的アプローチが見られることから、今後、ボーヴォワールは現象学者として位置づけられるだろう。さらに、『第二の性』以降の作品にも哲学的な研究は必要であろう。

「2.『倫理学ノート』におけるサルトルの倫理思想」を参照。ルノーの見解については、本論文、「第九章ボーヴォワールの承認論Ⅱ」の「2.『両義性のモラル』と『倫理学ノート』」を参照。

²⁸ H. Spiegelberg, *The Phenomenological Movement: A Historical Introduction*, pp. 530-531(『現象学運動』立松弘孝監訳、下巻 175-177 頁)。

²⁹ Margaret A. Simons, *Beauvoir's Early Philosophy: The 1927 Diary* (1998), *Beauvoir and The Second Sex: Feminism, Race and the Origins of Existentialism*, Rowman & Littlefield, 1999, pp. 200-201. The Beginnings of Beauvoir's Existential Phenomenology, *The Existential Phenomenology of Simone de Beauvoir*, Dordrecht, Neth.: Kluwer Academic Publishers, 2001, p. 35.

³⁰ M. A. Simons, *Beauvoir's Early Philosophy: The 1927 Diary*, pp. 204-205. The Beginnings of Beauvoir's Existential Phenomenology, p. 38.